

「障害を理解するための絵本」制作の試み (第1報)

—— 制作した絵本について ——

平林 あゆ子

Making a Picture Book to Promote Understanding of Children with Disabilities I

Ayuko HIRABAYASHI

1. はじめに (報告の目的)

最近、インクルージョン (全ての子どもを包み込む教育システムにおいて、一人ひとりの特別なニーズに応じた教育を考えること) が進みつつあり、保育所、幼稚園、地域の学童クラブ等において障害をもつ子どもと健常児との接点が見られるようになった。いま、障害児と健常児の相互理解の工夫が切に求められている。

そこでインクルージョンを促すために、保育士志望の学生、現役の幼児教育者、障害児をもつ保護者等と「障害を理解するための絵本」を制作した。それら絵本の有効性と相互のコミュニケーション支援のあり方を検討することを目的としているが、ここでは、まずそれらの絵本の評価を学生、現役の幼児教育者、筆者によって行い、高い評価を受けた「絵本」のうちダウン症と自閉性障害をテーマとした絵本を紹介する。

また絵本の制作の過程において「障害」という深い意味内容、「障害」にまつわる用語についてどのような表現が適切であるかを検討し考察した。また、障害関連の専門用語を子どもたちにどのように表現すると分かりやすいか推敲を重ねた。

2. 方法

インクルージョンの促しの教材として「障害を理解するための絵本」の制作指導を保育士志望の学生に「障害児保育」の授業で4年間試みた。また、学生や現役の幼児教育者、障害児をもつ保護者とともに絵本を共同制作した。それらの絵本を「①絵本の内容のまとまりと分かりやすさ、②文章や絵の的確な表現、③豊かなアイデアと工夫、④絵本としての芸術性、⑤完成度と人の感動、⑥子どもに理解できる分かりやすい表現」という視点から評価を行った。その過程で、障害と障害児の理解を深め、絵本の中で「障害」について子どもたちにどのように表現すれば、相互理解が促されるのかについて検討した。

高く評価された絵本のうち、「障害」という深い意味内容、障害にまつわる難解な用語を子どもに理解できるような表現に改め、分かりやすくするためにことばを推敲して制作したものをここに紹介する。

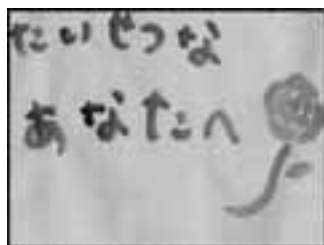
3. 「障害」をどのように絵本のなかで表現するか

「国際補助代替コミュニケーション学会」のリーサーシンポジウムにおいて、「ICF」(International Classification of Functioning: 障害についての国際分類)をテーマとする分科会にて“participation”(参加)について議論していた。筆者は障害児を指して“handicapped children”ということばを使用した。その時、筆者はそのことばを「不利な条件をもつ」という意味合いで使用したのであるが、オーストラリアの著名な研究者が「もはや我々は“handicapped”ということばは使用しない。」と筆者のことばを遮ったのである。それでは、日本語の障害児、健常児は英語ではどのような言い方をするかというところ、「children with disability”, “children without disability”を使用しているのである。handicap(不利な条件)は、障害をもたない一般の人々が作っているというのがその理由である。さらに障害をもたない人々には障害のある人々の社会にある不利な条件をなくすように努力する義務があるというのが、我々の世界の考え方になっているという主張であった。実際、最近の障害関連の論文においても、そのような記載になっていることが確認できた。ここで紹介する絵本は、そういった「障害」にまつわる用語を検討し、ことばを選んだ。

4. 高い評価を得た「障害を理解するための絵本」

ここで紹介する絵本は、筆者の監修となっており、文は適切なことばに練り直したものである。

①ダウン症をもつ保護者の気持ちが表現されている『大切なあなたへ』¹⁾



1



2



3



4



5



6

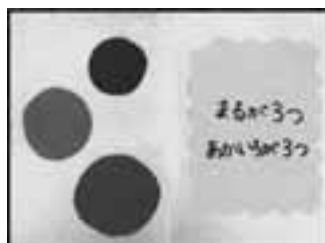


7

②ダウン症の子どもはそれぞれ個性があり、みんなとお友だちになるために生まれてきたことを知らせる『かみさまからのおくりもの』²⁾



1



2



3



4



5

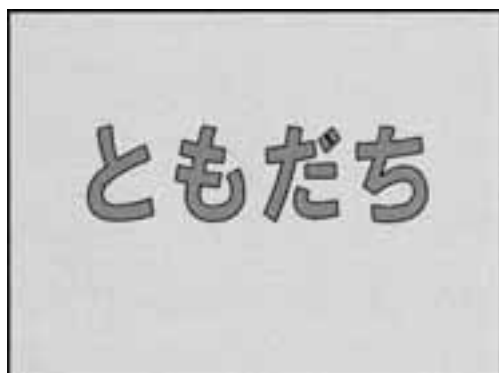


6



7

③自閉症の子どもの特徴的な反響言語や固執性などの行動、得意とすることなどを場面を提示しながら子どもの素直な視点で分かりやすく語り、心暖まる『ともだち』³⁾



1



2



3



4

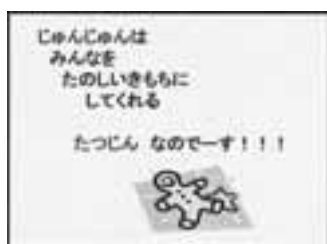


5



6

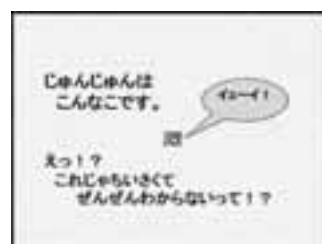




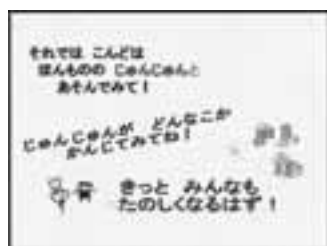
13



14



15



16



17

5. 考察

(1)「障害」は日本語で子どもに分かりやすい適切なことばが見当たらず、創作絵本において、「びょうき」と置き換える場合が多数見られた。しかし「障害」は病気ではない。

2005年版の和英辞典による「障害」の英語訳の記述は、ルミナス和英辞典第2版⁵⁾において「障害者」は“handicapped”、“a disabled person”と記載されている。障害児教育はeducation of handicapped (challenged) childrenとしており、括弧付けでchallengedは、disabledの婉曲表現でもある。また、グランドセンチュリー和英辞典第2版⁶⁾においては“the disabled”、“the handicapped”としているが、“a person with different abilities”という最も婉曲的表現を付加したり、身障者を“a physically challenged”という表現も付加している。それは、現在の意味内容である。“people with disability”を明確に反映した記述にはなっていないが、“challenged”や“different ability”の記載に「障害」についての考え方の変遷が伺われる。また、「障害」の害という文字がいけないと「障碍」と表現する人もいる。文字を変えただけでは人々のその捉え方の実態は変化しない。しかしことばは、ものの捉え方、視点を表す面もあると考えれば、より良い表現の仕方が望まれる。

(2)障害にまつわる難解な用語をやさしく説明する必要がある。創作絵本において、例えばダウン症の原因を「染色体に異常がおきてしまう病気」という説明では子どもには理解できない。これらの絵本についての子どもたちの理解の検討は、これからの検討課題でもあるが、例えばここに掲載したダウン症をテーマとした絵本「たいせつなあなたへ」の中で、筆者は推敲を重ね、以下のような説明を試みた。

「おなじ家^{いえ}をブロックで つくるのに一つブロックが ^{おお}多すぎても おなじ家^{いえ}は つくれないね。人のからだも ^{ちい}小さなブロックが くみあわさってできていて ^{おお}一つ多くても とくべつ

なものになっちゃうの。それがダウン^{しょう}症なの。」

(3)「自閉症」は自閉症スペクトラムと称されるように、基本症状は類似していても、子どもにより様々な症状が出現する。自閉症をテーマとした絵本において、それを固定的に捉えさせるような表現を回避しながら、自閉症を理解するための表現を模索し適切な表現としなければならない難しさがある。また、学生にとっての絵本制作は、ボランティアで長期に接したうえでの創作ではあるが、体験はまだ浅く、絵本の中で自閉症児が相手の気持ちを汲み取れるような描写をしてしまいがちであった。「障害を理解するための絵本」の内容はやさしく表現しなければならないが、あくまでも正確でなければならないので、「的確な表現」という評価項目は重要視しなければならない項目と考える。

注

-
- 1) 平林あゆ子 文 境珠里 絵
 - 2) 福山詩織 福田有紗 作 平林あゆ子 監修
 - 3) 平林あゆ子 文 笠井恵 絵 平林あゆ子 監修
 - 4) 大矢貞子 文 大矢淳二 絵 平林あゆ子 監修
 - 5) 小島義郎・竹林滋・中尾啓介・増田秀夫（2005）ルミナス和英辞典，研究社，940
 - 6) 小西タ七（2005）グランドセンチュリー和英辞典第2版，三省堂，733